

JA全農ウィークリー

4-5面

グループ会社代表者セミナーを開催

(グループ会社統括部)

8面

朝日新聞スポーツシンポジウム

「高校野球と食事」開催(広報・調査部)



パネルディスカッションで食の大切さを伝える(8面)



「栃木県産とちおとめ&スカイベリーサワー」新発売(3面)
みかんサワー」新発売(3面)



会社代表者および本会役職員など約220人が参加(4-5面)

2 九州産青果物の複数県域による共同輸送を実施

(園芸部・経営企画部・全農物流株)

第39回全農酪農経営体験発表会を開催(酪農部)

3 「JFフードサービスバイヤーズ商談会」に全農グループ会社と共同出展

(営業開発部)

「栃木県産とちおとめ&スカイベリーサワー」新発売(営業開発部)

「和歌山県産温州みかんサワー」新発売(営業開発部)

6 プロフェッショナルを追う(5)

福岡県本部 農機資材部 生産資材課
県南地区肥料農薬推進担当・土壌医
久保成人さん

7 JAズームイン(徳島:JAあわ市)

8 JAタウンショップ紹介

広島とれたて元気市(広島県)

Web
限定

秋田米フォーラム2021開催(秋田県本部)

「横濱ハーバー 三浦こたわりかぼちゃ
パウンドケーキ」新発売(神奈川県本部)

クリスマス向けバエリアのオンライン
レッスンを開催(米穀生産集荷対策部)

Web版JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>



『JA全農トピックス』の
ツイッターはこちらから



News!



九州産青果物の複数県域による共同輸送を実施

新たな配送ルート構築に期待

園芸部・経営企画部・全農物流(株)

共同配送便(大田市場)



九州各県ではドライバー不足に加え、2024年4月から法律でドライバーの時間外労働の上限が規制され、1日に運行できる距離が制限されるなど、青果物輸送の問題が深刻化しています。このため、トラックが満載にならない3県の青果物を、全農の業務提携先である(株)ファーマインド福

全農と全農物流(株)は、九州北部3県(福岡県本部、長崎県本部、JAさが)による共同輸送試験を実施しました。複数県域での青果物のトラック共同輸送は、全農として初めての試みです。

岡センターで中継し、1台にまとめて大阪・東京の卸売市場へ運ぶ共同輸送の実証を行いました。完全コードチェーンによる品質保持、入念な事前準備によるスムーズな運行など、新たな配送ルート構築が期待できる結果となりました。今後、青果物輸送の効率化に向けて取り組みを進めていきます。



パレットを活用したスムーズな荷降ろし

News!



第39回全農酪農経営体験発表会を開催

6戸の酪農家が発表

酪農部



前列左3番目から松本陽一さん(埼玉)、鈴木昇さん・ともえさん(茨城)、モニターは左上:萱森健太さん(福井)、右上:清水繁勝さん・文子さん(岩手)、左下:高橋彩希さん・悠さん(高知)、右下:藤野和有基さん(福岡)

この発表会は酪農家の経営安定と発展に寄与することを目的に、全国の優れた酪農経営や技術などを酪農家自身の体験をもとに発表してもらうものです。今年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、東京・大手町の日経ホールとウェブ会議システムを併用して開催しました。

当日は6戸の酪農家が発

酪農部は11月26日、「第39回全農酪農経営体験発表会」を開催しました。

表。最優秀賞には高い技術と収益水準に加え、農地集積などによる循環型酪農を目指し、消臭対策など都市近郊酪農のモデルになり得る経営であることが評価された埼玉県の松本陽一さん・聡美さんが選ばれました。また、OPUIVF用施設(生体卵胞卵子吸引・体外受精用施設)を地域の酪農家に開放するという新しい技術普及や支援の在り方を提示した岩手県の清水繁勝さん・文子さんが「先進技術普及地域貢献賞」、カウコンフォートや従業員の労働環境改善の取り組みが評価された福岡県の藤野和有基さんが「人とウシにやさしい経営者賞」を受賞しました。



「JFフードサービスバイヤーズ商談会」に全農グループ会社と共同出展

外食・中食企業に向けて国産農畜産物の魅力やおいしさを提案

営業開発部

国産農畜産物を使ったメニュー提案



この商談会は（一社）日本フードサービス協会が外食・中食企業向けに開催しています。緊急事態宣言明けに行われた今回は119社が出展し、1733人が来場しました。ブースでは「簡便」「こだわり」「四季」「健康」のテーマを設定。外食業界の人手不足やデリバリー・テークアウトの需要に対応した「簡便」商品や、「健康」ニーズ向けの米粉や大豆ミートなどを、メニュー展示や試食を通じて提案しました。その結果、前回の約2倍となる79社103人のバイヤーに国産農畜産物の魅力やおいしさをPRすることができました。今後、全農グループ会社と連携し、外食・中食企業への営業を強化していきます。

営業開発部は11月16日、東京都で開催された「JFフードサービスバイヤーズ商談会2021」に、全農グループ8社と共同出展しました。



「栃木県産とちおとめ&スカイベリーサワー」新発売

栃木県を代表するイチゴをバランス良くブレンド

営業開発部



北関東・東北エリアのセブンイレブン約3000店で先行販売しています。セブン&アイグループのイトーヨーカドー（東北）、ヨーク、ヨークベニマル、シエルガーデンの一部店舗での販売も予定しています。※店舗により、取り扱いのない場合があります。

この商品には栃木県産のイチゴ「とちおとめ」と「スカイベリー」の果汁を計10%使用しています。アルコール度数は4%で、栃木県を代表するイチゴをバランス良くブレンドし、フレッシュな酸味と芳醇な甘味が特長の味わいに仕上げました。傷や変形により流通できないものや、粒が小さく生食用として敬遠されがちな「とちおとめ」や「スカイベリー」を加工用として使用することで、生産者の所得向上を目指しています。

全農は、国分グループ本社（株）と「栃木県産とちおとめ&スカイベリーサワー」を共同開発しました。アシードブリュール（株）で製造し、12月15日から発売しています。



「和歌山県産温州みかんサワー」新発売

生果販売に適さない温州ミカンを使用

営業開発部



関西・中四国エリアのセブンイレブン約4500店で先行販売しています。セブン&アイグループのヨーク、シエルガーデンの一部店舗での販売も予定しています。※店舗により、取り扱いのない場合があります。

冬のおいしい風物詩の温州ミカンは日本を代表する柑橘で、今では周年出荷され、5〜9月ごろまではハウス栽培のものです。アルコール度数4%のこのサワーには、和歌山県産温州ミカンの果汁を20%使用して、温州ミカンの特徴であるやさしい甘味と爽やかな酸味を生かした味わいに仕上げました。病害虫による果皮表面の障害や傷の度合いなどによって生果販売に適さない温州ミカンを加工用として使用することで、生産者の所得向上を目指しています。

全農は、国分グループ本社（株）と「和歌山県産温州みかんサワー」を共同開発しました。日本果実工業（株）で製造し、12月15日から発売しています。

グループ会社代表者セミナーを開催

全農は11月10日、「グループ会社代表者セミナー」を開催し、会社代表者および本会役職員など約220人が参加しました。昨年に続き、全国約100カ所をオンライン会議システムでつなぎ開催しました。

【グループ会社統括部】

セミナーの開会に当たり、菅野幸雄会長が、「農業・農村を取り巻く環境変化に対応するため、2030年のグループの目指す姿を、持続可能な農業と食の提供のため、『なくてはならない全農』であり続けることとし、その実現に向け、他企業とのアライアンスも加速し、一丸となつて取り組む」とあいさつしました。

農バリューチェーンの構築」など、六つの「全体戦略」の下、耕種・畜産・くらし・海外・管理の各分野で「中期事業戦略」を策定していることを示し、その実現のため、グループ一体となった事業推進が不可欠であることを訴えました。

セミナーでは、グループ会社の実践事例報告として、全農グリーンリソース(株)代表取締役社長の熊坂準三氏が、同社の新規事業や労災事故防止に向けた取り組みについて講演しました。



開会のあいさつをする全農菅野会長

また、全農と事業連携に取り組む企業として、(株)伊藤園代表取締役社長の本庄大介氏とマーケティング本部長の志田光正氏、(株)ファーマインド代表取締役社長の堀内達生氏にご登壇いただき、顧客ニーズを踏

まえた事業・商品価値創造の取り組みや、物流・情報インフラを活用した青果物流通改革に向けた全農との取り組みについて、大変熱のこもった講演をいただきました。

最後に、全農は組合員・会員JAに期待される総合力の発揮に向け、グループ内外での事業連携を加速することを確認し、盛況のうちに閉会となりました。



全農グリーンリソース(株) 熊坂社長



全農の次期中期計画について語る野口理事長



外部講師による講演

伊藤園の成り立ち

(株)伊藤園 代表取締役社長 本庄 大介氏



1966年に当社の前身であるフロンティア製茶(株)を設立しました。当時、お茶は量り売りが主流でしたが、パッケージ茶(リーフ製品)を開発し、販売を開始しました。68年に業界初のTVCMを放映し、「おいしいお茶」のフレーズが人気を博して、知名度が全国に広がりました。69年に商号を(株)伊藤園に変更し、世界初の「缶入り煎茶」、「ペットボトル入り緑茶飲料」など、「他社のものまねはない」ことを社風とし、製品開発を行っています。

当社は「お客様第一主義」の経営理念を掲げ、「消費者」「株主」「販売先」「仕入先」「金融機関」「地域社会」の皆さまをお客さまと考え、すべてのお客さまを大切にすることを経営の基本としています。

現在、JAグループとの主な取引内容は、緑茶や麦茶茶葉の仕入れと製品の製造委託です。全農が立ち上げた「ニッポンエールプロジェクト」に参画し、製品の共同開発も行っています。今後も連携をさらに強化して、日本農業の発展に役立てるように、二層の努力をしたいと考えています。

JAグループ様との農に資する取り組み

(株)伊藤園 マーケティング本部 本部長 志田 光正氏



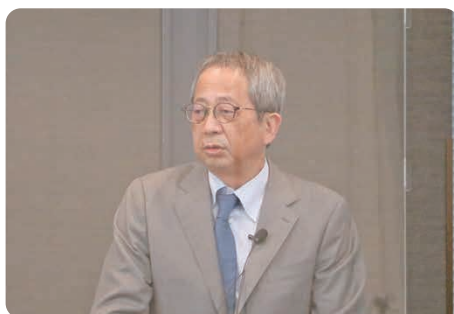
伊藤園はJAグループと連携して、産地の生産振興・地域社会の活性化に貢献するために、「ニッポンエールプロジェクト」における製品の共同開発と「伊藤園茶産地育成事業」による国内遊休地を活用した高品質茶葉の効率的な生産に取り組んでいます。

当社は、世界のお客さまの健康に貢献する「健康創造企業」として、お茶を通じて健康に資する製品を提供し、一人一人の豊かな生活を支える「世界のティーカンパニー」を目指しています。おいしさはそのままに「体脂肪を減らす」「認知機能の精度を高める」など機能性表示食品を開発して、お客さまの健康をサポートしています。

今後も「自然・健康・安全・良いデザイン・おいしい」をコンセプトとした製品開発への思いを受け継ぎながら、JAグループの皆さまと一緒に、健康価値とおいしさを創造したいと考えています。

あるべき青果流通とその機能

(株)ファーマインド 代表取締役社長 堀内 達生氏



かつて、甘いバナナが高く売れるという消費者ニーズを、日本の流通業者は理解していませんでした。アメリカで整備されていたコールドチェーンを取り入れ、甘いバナナが消費者にいつでも届く流通を実現したいと考え、当社を設立しました。

青果物の流通において、二つのインフラ整備が重要です。1点目はコールドチェーンの構築による物流インフラの整備です。青果物は物流コストが大半を占めます。高い鮮度を維持した青果物を届けるコールドチェーンを整備し、物流コストを削減する必要があります。

2点目は情報インフラの整備です。青果物は品目特性から統コードがないことも影響して、書面・電話による受発注が行われています。デジタル化によりシステムを整備することで、効率的な管理体制を構築する必要があります。

販売価格の最大化のためには、適切な需要予測による「適正配荷」と、それを実現する物流インフラの整備が必要です。全農との業務提携により、産地と消費者をつなぐことで生産者の手取り向上に貢献したいと考えています。

プロフェッショナルを追う(5)

福岡県本部農機資材部生産資材課
県南地区肥料農薬推進担当・土壤医

くぼあきひと
久保成人さん

土壌・作物・作業効率など 農家のニーズに合わせ肥料を提案

全農グループには専門的な業務に従事している職員がいます。今回は、福岡県本部農機資材部生産資材課で肥料・農薬の推進業務を担当する久保成人さんに迫ります。【広報調査部】

——これまでのキャリアについて教えてください。

2014年に入会し、福岡県本部農機資材部生産資材課に

配属となりました。県北地区の肥料農薬推進を3年間担当した後、九州営農資材事業所で肥料の推進担当を経て、19年から

県南地区の肥料農薬推進を担当しています。

——仕事について教えてください。

JAへの肥料・農薬の販売推進や技術普及が主な仕事です。新しい農薬の紹介や現地での試験調査、施肥の新技術ができれば同様に試験調査を実施します。最近では、普通作（主穀作）の大口農家へ



ペレット化に成功した堆肥の混じった肥料

——オリジナル肥料の開発とは？

土壌診断に基づき、各圃場（はしやう）に合った肥料を提案、開発しています。土壌分析センターでの分析結果を基に処方箋を作成し、

のオリジナル肥料の開発や、未利用資源（畜産堆肥）の肥料原料としての活用などにも取り組んでいます。

JAの担当者、農家と相談しながら肥料を設計します。

2020年の肥料法改正で、肥料設計の自由度が大幅に増しました。養分の過不足や肥料の成分を見るだけでなく、圃場の状況や散布する機械、個々の作業スタイルなども考慮します。

近年は農家の大規模化が進み、特に省力化が求められています。今まで数回に分けて施肥していたところを1回で終わらせるように肥料を設計するなど、労力を削減することは人件費を抑えることにもつながります。

最近では、大麦若葉のオリジナル肥料を作りました。

——未利用資源を活用した肥料について教えてください。

担当するJAから、堆肥の処理に困っている」と相談がありました。



堆肥を圃場にまくことはいいと農家も分かっているが、重労働だったり、専用の農機が必要だったりします。肥料法の規制緩和もあり、今まで別々にまいていた堆肥と肥料を一度に散布できるよう、堆肥が入った肥料を開発

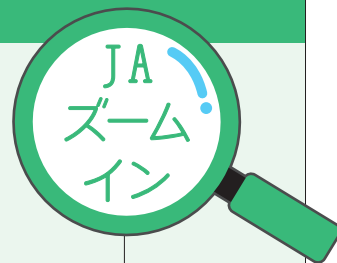
しました。堆肥を肥料と混ぜて粒化（ペレット化）するには機械加工適正や成分・水分などの安定化が必要です。堆肥センターと肥料メーカーをつなぎ、双方の努力で何とかペレット化することができました。今はその堆肥入り肥料を管内の大豆農家が使ってくれています。

——今後、取り組みたいことは？

地域で余っている堆肥のように、海外資源に頼らない未利用資源の有効活用です。今は自分が担当する管内の話ですが、九州から原料を探して開発するなど、広域供給に取り組みたい。堆肥はリーズナブルで、肥料代も抑えられます。肥料として散布できるように堆肥の品質、加工工場への運搬方法、加工後の品質管理を適宜調査し、一定した品質の肥料の作成を目指したいです。



JAの担当者、農家と肥料設計について話し合う



JA合併でブロッコリー販売の スケールメリットを発揮

JAあわ市は2021年4月1日、徳島県阿波市の3JA（JA阿波町、JA阿波郡東部、JA市場町）が合併し、誕生しました。

これにより管内では「夏秋なす」の栽培面積は約20ヘクタールと県内の約6割以上のシェアとなりました。また年々増加するブロッコリーの栽培面積は約300ヘクタールとなり、10年で約5倍となっています。



出荷の様子

ブロッコリー生産に 生かすスケールメリット

現在、ブロッコリー部会は旧JAの地区ごとに3支部あります。合併によるスケールメリットを発揮すべく、生産力の増進と販路拡大を図り、生産農家の所得向上を目的に、7月に「JAあわ市ブロッコリー部会連絡協議会」を設立しました。

協議会では、作型や品種構成の統一を実施し、今までは主に段ボール出荷だったものを、6キロ詰め発泡スチロールに統一し、資材の発注をまとめることでコストの低減を目標としています。

今後は出荷先の集約を行い、有利販売のための協議



荷姿の統一



を続け、次年度中の完全な部会統一を目指しています。

さらなる 産地拡大への方策

管内では圃場準備や定植をサポートする農機の貸し出しや、オペレーターによる作業補助を積極的に行い、ブロッコリーの栽培面積拡大に寄与してきました。今回の合併を機に、さらに作業サポートの増強を行

JAあわ市 (徳島県)



概要

令和3年3月31日現在

正組合員数	5491人
准組合員数	1677人
職員数	95人
販売品取扱高	28億7千万円
購買品取扱高	13億7千万円
貯金残高	503億9千万円
長期共済保有高	1155億6千万円
主な農畜産物	ブロッコリー、ナス、 キヌサヤ、ミニトマト

鮮度保持のための自動水詰め作業

うため、新たに畝立て成形機と移植機を追加導入しました。また近年増加している冬のマルチ栽培に対応するためのマルチ張り機や、根こぶ病対策の薬剤散布を畝立てと同時にを行う装備も追加導入するなど、生産者の要望に合わせたサポート体制作りに注力しています。

また、今年度は同JA所有の育苗センターの増強工



出荷前のブロッコリーの生育を確認する生産者



ドローン防除試験の様子



阿波町の優良品種試験展示圃

事をしています。夏季の暑熱対策としての細霧冷房機の導入、冬季の苗の生育促進のための加温機設置など、高品質のブロッコリー苗の提供を目指しています。

合併のスケールメリットを生かしながら、育苗部門と圃場作業部門を充実させることで、継続的に栽培できる体制作りを実現し、今後もブロッコリー増産の推進に取り組みます。

朝日新聞スポーツシンポジウム「高校野球と食事」開催 パネルディスカッションで食の大切さ伝える

全農は、立命館大学と連携し進めてきた「高校球児向け栄養教育プロジェクト」の成果を発表しました。

【広報・調査部】

シンポジウムでは立命館大学スポーツ健康科学部の海老久美子教授による基調講演「高校野球とお米の関係～成長期選手への地域型食生活のすすめ」と、同大学の公認スポーツ栄養士・首藤由佳氏から研究の成果発表がありました。

またパネルディスカッションでは、パネリストとして、元プロ野球選手の上原浩治氏、藤川球児氏、日本大学第三高校硬式野球部監督の小倉全由氏、海老教授が登場し、自身の立場やこれまでの豊富な経験を交えて「食」の大切さが語られました。

詳しくは特設ページをご覧ください。



<https://www.asahi.com/ads/sportssympo2021/>



パネルディスカッションの様子



あいさつする全農安田専務



基調講演する海老教授



パネルディスカッションでの
上原浩治氏



藤川球児氏



JA全農のインターネットショッピングモール

JAタウン ショップ紹介

広島とれたて元気市

「広島かき」がたっぷり入った土手鍋セットです。広島かきはもちろん、土手鍋に必要なみそと冷凍うどんがセットになっています。

かきの土手鍋は、鍋の周りにみそを塗りつけ、かきと豆腐や野菜を煮ながら食べる広島の郷土料理です。このセットにお好みの具材を加えるだけで、ご家庭で簡単に本格土手鍋が楽しめます。

全国かき生産量第一位を誇る広島県が育んだかきを、ぜひご賞味ください。



広島かきの土手鍋セット...2780円(税込み)



ご注文は
こちらから



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは ☞ shop@ja-town1.com

休刊のお知らせ
12月27日号は休刊いたします。
次は1月1日号です。

私たち全農グループは、
生産者と消費者を 安心で結ぶ懸け橋
になります。